
昏い道連れ

洸海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

昏い道連れ

【Zコード】

Z4558Y

【作者名】

洸海

【あらすじ】

一人前の神官戦士になるため、「しるし」探しの旅をしていると
いう少年。その後からついてくる、正体不明の暗い影。行く先々で
出会う人々の目を通して語られる少年の成長、そして影の正体は
。和風異世界ファンタジー。サイトにはダウンロード版のみ置
いてあります。残酷描写はたまに少しあるだけで、タグを付ける
か付けまいか悩むレベル。

— 雨宿り (1) (前書き)

上代と室町だか江戸だかをじりぢりにしたよつな、なんぢやつてジヤパーズファンタジー設定です。神道用語や祝詞も多く出てきますが、現実の定義や用法とは別物としてじい覽下とい。

あんた、雷は好きかい？

俺は大好きだね。自分の名前に雷の文字が入ってるからってのもあるが、真っ黒な雲の中にひらめく稻妻の光は、他のどんなものよりも格好いいじゃねえか。犬や狐や、小胆な奴らが、こぞつて穴蔵に頭をつつこんで震えている遙か上で、雲を引き裂き、空を駆け抜けろ。俺もあんな風に生きたいもんだ。

もつとも、そんな事が言えるのも、そいつが雨を連れて来ない場合だけだ。なぜかつて、俺は宿なしだから。

たまたま屋根の下にいる時はいいぜ、自分は濡れずに見物してられるからな。だが、こんな風に野原の真ん中でいきなりザーッと来られた日には、まつたく！

「くそったれ！」

文句のひとつも言いたくなるつもんだ。空きつ腹に雨がしみるぜ、ちくしょうめ。

右にも左にも、人家はまつたく見当たらなかつた。うち捨てられて荒れ放題の畠、ガマだの葦だのがぼうぼうに茂つた湿地。その間を走るこの小道の先には、前の宿でおかみが言つたのが正しければ、そろそろ豊平とよひらの村が見えて来るはずだ。そしてそこには、妖あやかし退治で日銭を稼ぐ俺みたいな流れ者に、仕事や情報を恵んでくれる周旋屋がある。

……はず、なんだがな。くそ、雨で行く手が見えやしねえ。ああ、腹へつた。

手の甲で何度も目を拭つたが、後から後から滝のよつて雨水がしだたり落ちて、何もかもがぼんやりとにじんでいた。

だから、道端に木立が見えた時も、俺はそこに誰か あるいは

『何か』 がいるとは思わず、やれ助かつたと木陰に駆け込んだだけだった。

「ああくそ、ひでえ田にあつたぜ」

ふつ、と息をつくと、水しづきが散った。いやもう、頭のてっぺんから爪先まで、ずぶ濡れもいいとこだ。どつからどこまで自分の体で、着物で、草鞋なんか、わかりやしねえ。田ん玉まで流れちまつてやしねえだろうな。

あれこれ悪態をつきながら、なおも降り続く雨を恨めしく見上げた時だった。

フツ、と後ろで何かが息を吐いた。その熱が体に届く前に、俺はぱつと振り返り、腰に差した刀を抜いた。

待つてましたとばかり、雪のような白い輝きがこぼれる。俺の商売道具にして唯一の相棒、妖退治のために神殿で清められた銘刀、月華。どんな妖だろうと、こいつの前には……

「つて、なんだオイ」

構えた刃を下ろし、俺は拍子抜けした声をもらした。薄暗がりの中にいたのは、紛らわしくも真っ黒の犬つころだつたのだ。子犬と言つにはでかいが、まだ成犬じゃない。クウンと甘えるように鼻を鳴らし、無邪気な黒い目でじつとこっちを見上げてやがる。

「びつくりさせんじやねえよ、わんころが。腹がへつてんのか？」

悪いな、俺もだ。おまえにやる物がありや、自分で食つてるよ

やれやれ。俺はため息をついて月華を鞘に収めた。わんころはそれをじつと見つめ、それからおもむろに近寄ると、ふんふんと俺の手を嗅いだ。

「だから、何も持つてねえつひとつてんだ。シッシッ」

別に犬は嫌いじゃねえが、こつもまとわりつかれちや、落ち着かねえ。追い払おうとしたのに、わんころはしつこく俺の臭いを嗅ぎ、前足でちよいと袂を引っ掻きやがつた。

「ええい、食つちまうぞコリワ！」

業を煮やして俺がわめくのと、

「クロガネ、戻つてこい」

子供の声が言つのが、同時だつた。俺は犬を驚かそうとして両手を振り上げたまま、ぽかんとなつて声のした方を振り向いた。

木立の奥の暗がりに、ぼうつと白いものが浮かぶ。さては今度こそ妖か、と俺は警戒したが、じきに正体がわかつた。白犬を連れた、白い着物の子供だ。見たところ十一歳かそこらだが、こんな所で何してやがるんだ？

黒犬は尻尾をくるりと巻き上げて、嬉しそうにそつちへ駆け戻つて行つた。小僧は黒犬の頭をちょっととなでてから、顔を上げてまつすぐに俺を見た。

「脅かしてごめんよ、おじさん。こいつ人懐っこくて、構つてくれそうな人を見付けたらすぐに飛んでっちゃうんだ」

「誰がおじさんだ、お兄さんと言え」

餓鬼から見りやあつさんでも、俺はまだ三十路のかなり手前だ。見知らぬ餓鬼から小父さんおじなんぞと呼ばれるほど、老けちゃいねえ。俺が唸ると、小僧は驚いたように目を丸くした。それからすぐ、面白そうに笑い出す。

「ごめん、お兄さん。俺あんまり、大人のひとの歳つて分かんなくてさ。第一この天氣でこの暗がりでその格好じや、おじさんでもおじいさんでも、区別なんてつかないよ」

笑われて俺は自分のなりを見下ろし、苦笑してしまつた。確かに、薄暗い木陰にずぶ濡れの男がぬーっと立つてたんじや、人か化け物かも分からねえな。

「まあな。で、おまえさんはどこの誰だい。その装束つてことは、神殿の小僧か」

俺が何げなく問うと、小僧はふつと表情を消した。どうやら身の上についちゃ、あんまり詮索されたかねえらしい。短い沈黙の後、小僧は作つたような明るい口調で答えた。

「元は深谷の神殿にいたんだ。でも、一人前になるには、外へも出なきやいけないって言われてさ。探し物の途中なんだ。そうそ、

おじさんを驚かせたこいつは黒鉄、こいつの白いのは雪白。俺は真理だよ」

「ご大層な名前だな」

俺は呆れて一匹の犬を眺めた。わんころなんぞ、シロクロでいいじゃねえか。気取りやがつて、さすが神殿育ちはお犬様も違うつてことかねえ。小僧に至つては真理サマと来る。ペッペつ。それはともかく、名乗られちゃこっちも黙つてるわけにやいかねえ。

「俺はライカ、雷の火だ。流れ者でね」

「うん、賞金稼ぎだね。さっきの刀でわかつた」

けろりと言われ、俺は顔をこわばらせた。無理に笑みを作ると、

口が半分がひきつる。

「おい小僧、長生きしたきや、その呼び方はするんじやねえ」

「どうして？ 流れ者とか根無し草とか言つより、正しい呼び方だと思つけど」

きょとんとした小僧の面を張り飛ばさなかつたのは、ひとえに腹が減りすぎて怒りも長続きしなかつたからだ。

「正しくても、俺たちはそう呼ばれるのが嫌いなんだよ。向かつ腹が立つ。特に神殿の奴に言われるとな。神官どもは、自分たちが妖退治をするのは金のためじゃなく、里の人間を守るためだ、なんぞとぬかしやがる」

「だつて本当のことだよ」

「大人が話してる間は黙つてろ。で、奴らがいちいちかまけてられねえ雑魚には、雀の涙ほどの賞金をかけて、俺たちみたいな腕つ筋だけの荒くれ者が、日銭を稼げるようにしてやつてる、つてわけだ。飯の種をくれてやつてんだ、ありがたく思え、つてな」

大体があの連中は、神官以外の奴が妖と関ると、途端にクソでも見るような目つきをしやがる。月華みたいな刀は妖を斬つて穢れが溜まるから、時々神殿へ持つて行つて清める必要があるんだが、そんな時でも、絶対に正面からは入らせちゃくれねえのだ。

「ふうん。俺が聞いた話とはずいぶん違うね」

小僧は単純に不思議そつな顔をしてつぶやいた。俺はなんだか疲れてしまつて、近くの木にもたれると、ずるずる座り込んだ。

一 雨宿り（2）

「何を聞いたんだか知らねえが、世の中は良い子ちゃんの耳に入る気持ちのいい言葉ほどには、きれいでも楽しくもねえって事を」「ため息をつくと、腹の中に残っていた最後の空氣までなくなつたような気がした。俺は小僧を見上げ、「おい、なんか食うもん持つてねえか」と投げやりに訊いた。

「ごめん。俺も昨日から何も食べてないんだ」

がつくり。俺は頭を膝の間に落とした。隣に小僧が来て、すとんと腰を下ろす。ちえつ、本当にこの一匹の犬を食つてやれたらいいんだがなあ。

と、小僧は何やらじりじりとやつて、胴乱から小さな物を取り出した。

「これぐらいならあるけど」

この際、口に入るならなんでもいい。俺はぱつと小僧の手に飛びついた。そしてふたたびがつくりする。木の皮じゃねえか。

「おなかは膨れないけど、少しは気が紛れるよ」

ほら、と小僧が言うので、何もないよりはマシかとその木つ端を受け取つてくわえた。しがんでいると、甘いような苦いような、妙な味が染み出でくる。確かに腹の足しにはならねえが、なんとなく飢えがおさまつたような気がした。不思議なもんだ。

俺が骨をしゃぶる犬みたいにいじましく木の皮をかじつてみると、横で小僧が勝手にしゃべりだした。

「俺がいた深谷の神殿ではね、賞金稼ぎには……あ、ごめん。流れ者には感謝しろって教えられたんだ」

「へーえ、そりやまた奇特なこつた」

「神官の中でも法部に属する戦士たちは、いつも何人かで組んで妖退治をしているから、一人で勝手にあちこちに行くことは出来ないんだつて。一匹一匹の小さな妖が悪さをしたからつて、ちょっと行

つて退治する、つてことが出来ないんだよ。そこで、おじ……お兄さんたちの出番だつてわけ」

小僧はそこまで言つて、俺が聞いてるかどうか確かめるように、こっちの顔を覗き込んだ。ちえつ、まったく、なんて目をしてやがるんだか。純真無垢つてのはこいつのを言つのかね。

「知つてる？ 賞金稼ぎの中には、元神官戦士つて人も結構いるんだよ」

「そいつあ初耳だな」

俺は思わず本氣で驚いてしまつた。小僧は得たりとばかり、にっこりする。

「きつとおじ……お兄さんみたいに神官を嫌う人が多いから、言わないんじゃないかな」

厭味な小僧だな、いちいち言い直すんじゃねえよ、ちくしょう。俺は苦い顔で睨んでやつたが、薄暗がりだから見えなかつたらしい。小僧は気にせず話を続けた。

「でも俺たちはそういう人の話をよく聞くよ。人を守りたくて神官になつたのに、まるで自由がきかないから、しまいに誰かを助けるために飛び出して行つちゃうんだつてさ」

「それが本当なら、神官も捨てたもんじゃねえがな。しかし俺が見てきた限りじゃ、神官なんぞ、どいつもこいつもくそつたれだ」

俺は言い捨てて、雨足の弱まつてきた空を見上げた。さつきよう明るくなつてきたようだ。これなら、もうじき出発できるだひう。今日中には豊平に着きたいからな。

小僧は、俺があんまり感動しなかつたせいか、ちょいとがつかりした様子で黙り込んだ。これだから餓鬼は嫌いなんだ、なんで俺がこんな気分にならなきゃなんねえんだよ？ 俺は弱い者いじめした悪党か？ 本当のことを言つただけだつてのに！ ああもう。

しうがねえ。俺はため息をついて、小僧の話に調子を合わせてやつた。

「まあな、おまえがいたような田舎の神殿じゃ、話は違うのかも知

れねえな。俺はだいたい、豊かな村や大きな町を回って、せこい妖怪ばかり退治してるからよ。そういう所の神殿はどかーんとでかくて立派だから、神官の連中もお高くとまつてやがるんだ

「そうかもね」

小僧は言つて、神妙な顔つきでうなずいた。やれやれ。

「おつ……雨がやんだみたいだな。んじやな」

俺は立ち上がると、口にくわえていた木の皮をちょいとつまんで、

「これ、ありがとよ

礼を言つてからその辺にポイと捨てた。俺が歩きだすより早く、小僧が慌てて立ち上がり、一匹の犬とそろって俺を見上げた。おいで、まさか。

「もう行くの？」

……待て。ちょっと待て、待てつたら！ そんな目で俺を見るな！ しかも三人がかりとは卑怯だぞ！

「勘弁してくれ」

俺はうめいて顔を覆つた。冗談じゃねえ、てめえの飯もままならねえつてのに、いきなり一人と一匹の食いぶちまで面倒見られるかつてんだ。

苦惱する俺を見て、小僧はおかしそうな笑い声を立てた。

「待つてよ、俺まだ何も言つてないよ」

「言つたも同然だろうが、くそ、わんこ今まで一緒になつて見つめやがつて！」

「あはは、おじさん、犬好きなんだ」

「おじさんじやねえつつってんだろ！」

凄んで見せたが、効果はなかつた。ごめんごめん、なんて言いながら、小僧はけたけた笑つてやがる。

「はあ……まつたく。あのな、俺はこれから豊平に行って、周旋屋で仕事もらつて、それを片付けなきゃ飯一杯にもありつけねえんだぞ。ついて来たつて、いい事なんざなんつにもねえんだぞ」

「心配しなくても、俺だつて妖退治に手を貸せるよ。こう見えても

一応、神官としての修行は積んでるからね。簡単な法術は使えるし、剣も持つてる。雪白と黒鉄も戦えるよ」

「どうだかな」

俺は胡散臭い気分で一匹の犬を見やつた。黒助の方は相変わらず機嫌良さそうに、尻尾を小さく揺らしながら無邪気に俺を見つめている。白い方は逆に、俺を踏みするような目付きをしやがつた。何様のつもりだ、このわんころが。

「どっちにしろおまえらの行き先も豊平だつてんなら、しょうがねえ、『一緒にするさ。けど、いいのか？』何か探し物をしてるんだろ」念のため小僧に確かめると、なぜだか小僧は急に曖昧な顔になつてうなずいた。

「うん、いいんだ。どこにあるのか、はっきり分かつてるわけじゃないから」

「……へえ？」

「いつたい何を探してるってんだ？ ちよいと気になるが、どうせそう長く一緒にいるわけでもねえだろ？ 俺の知ったこっちゃやねえな。」

「じゃ、日が暮れちまわねえ内に行くか！」

景気づけに威勢よく上げた声に調子を合わせ、疲れた足を励まして歩きだす。

少し進んでから、俺はふと何かが気にかかり、ちらつと後ろを振り返った。小僧とわんころはしつかりついて来ている。どうやら、空腹のあまり木陰でまぼろしを見た、という都合のいい話にはなつてくれねえらしい。

（しかも……なんか余計なもんまでいやがるぞ）

俺は何も見なかつたふりで、また前を向いた。だが間違えようもなく、俺たちのずっと後ろに、そこだけまだ雨が止んでいないかのような暗がりが、うつそりと佇んでいた。

振り向かなくても分かる。そいつは、俺たちを黙つて見送り……

それからゆつくり、後を追つて動き出すのだ。

妖とは少し気配が違つ。今のところ悪をする様子もない。下手につついて招き寄せるより、放つておきや自然に離れてくれるだろう。たぶん。

(でなけりや、こここの出番つてだけだ)

俺は左手で月華の鞘を握り、そうならないことを祈つた。この刀であいつが斬れるかどうか、ちょいと自信がなかつたからだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4558y/>

昏い道連れ

2011年11月16日03時16分発行